

海陽町竹ヶ島の方言

方言班（徳島県方言学会）

仙波 光明^{1*} 岸江 信介² 島口有香子³

要旨：海陽町竹ヶ島には、音声上の特徴として、四つ仮名「ジとヂ」「ズとヅ」（歴史的仮名遣いでは、昔の発音どおりに区別されている）の発音がそれぞれ区別されているという情報があった。また、県南ではガ行やダ行の語頭にも入り渡り鼻音が現れるという先行研究がある。これらの音声的特徴を確認することが今回の第一の目標であった。しかし、今回の調査では確認できなかった。また、語彙等については地元の方から提供されたリストについて、その位置づけを検討した結果、独特の語が多く確認できた。

キーワード：灘方言、四つ仮名、語頭のガ行鼻濁音、古い発音、高知県

1. はじめに

今回の調査は、（1）調査票を用いた、音声に関する面接調査、（2）自然談話の収録調査、の2種類の方法を採用した。自然談話は、実際に使用される方言を観察できるという点で有効である。調査は2019年12月に竹ヶ島公民館に赴き面接調査をさせて頂いた。

2. 方言区画上からみた海陽町方言の位置づけ

徳島県は四国の東部に位置し、近畿方言との共通性も強くうかがえる地域である。森（1982）の徳島県の方言区画によると、海陽町は、「灘」に属している。なお金沢治（1976）はこの地域に「海部」の名勝を与えていて、同じ地域を示すと考えて差し支えない。なお、森に従えば、海陽町は「下灘」に属し、由岐・日和佐・牟岐の「上灘」と区別される。

3. 音声・音韻の特徴

1) 四つ仮名について

高知県境に近い竹ヶ島の方言音声には、高知方言

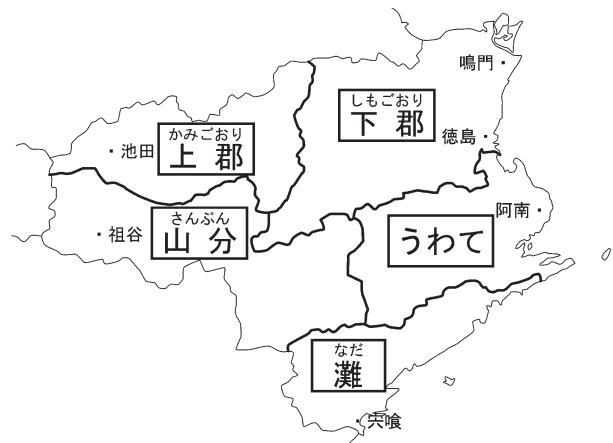


図1 徳島県における方言区画

と同様、四つ仮名（じ／ぢ／ず／づ）の区別が残存する可能性があり、調査を実施した。

さて、高知県の四つ仮名について、『日本方言大辞典』の解説では、次のように述べられている。

高知県では、例えば語頭では「字」と「痔」を [zi] と [di]、「狡い」と「頭巾」を [zurui] と [dukin] のように摩擦音と破裂音で区別し、非語頭では「富士」と「藤」が [ɸu zi] と [ɸudi]・「葛」と「屑」を [kuzu] と [kudu] のように、さらに

1 徳島大学名誉教授 2 奈良大学文学部教授 3 四国大学地域教育・連携センター講師

* 〒771-1202 徳島県板野郡藍住町奥野字和田109-14

ヂ・ヅの [d] の前に軽い鼻音が挿入される。

高知方言調査の録音を聞いたときの仙波の判断では、語頭以外の「ぢ・づ」には入り渡り鼻音が現れ、「じ・ず」にはそれが現れない。

たとえば「富士（ふじ）」は普通に「フジ」[ɸuʒi]と発音されるのに対して、「藤（ふぢ）」は [ɸu~dʒi]（フンジ）のように発音される。

さて、竹ヶ島での調査は、生え抜きで昭和一桁生まれの話者5名を対象に調査用紙に記されている語を読み上げてもらう方法を探った。四つ仮名の調査では「字」と「痔」、「屑」と「葛」とともに区別は認められず、「字」「痔」はいずれも [dʒi]、「屑」「葛」はいずれも [kuzu] であった。「富士（ふじ）」と「藤（ふぢ）」についても同様で、3人からは「同じ（発音）」との証言が得られ、他に「分からん」という反応もあった。

2) ガ行鼻濁音について

海部地区には、ガ行鼻濁音が語頭にも現れるという報告がある（宮城1956、上野1997）。なお、那賀川流域でも語頭のガ行鼻濁音が観察されることがあった（金沢浩生他2001）。

今回の竹ヶ島調査では、厳密な意味での語頭のガ行鼻濁音は観察されなかった。ただし、昭和10年代生まれの女性の発音だけに、「赤いガラス」「厚いガラス」の「ガ」に軽く鼻音が現れた。この場合は厳密には語頭と言いがたく、文中のイに続くガ行音であるため鼻音が現れたと説明することができる。

なお、この女性の場合、「銀」「下駄」の発音で語頭に軽い入り渡り鼻音が現れているようでもあったが、明瞭なものではなかった。

3) チ・ツ・セ・ショの発音

今回の調査で、昭和8年生まれの女性の発音に興味深い現象が観察されたので、それについて報告しておく。

徳島県内の高齢者のツ発音が、ときたまトゥ [tu] で現れることがある。例えば「強い」が [トゥオイ] に発音される（ボルティスワ トゥオイケンナ）のを筆者はテレビを通して耳にしたことがあるが、これが、たまたま現象なのかどうか、疑問であった。今回観察できた発音は、そのような単発的かもしれない現象と異なり、チ・ツの子音が、「土」を [tuti]

と発音するように規則的に [t] で発音されていた。以下にその例を示す。

チ：血 [ti:], 父 [titi], 地図 [tidzu], 餅 [moti]
ツ：土 [tuti], 靴 [kutu]

また、四つ仮名に関わるヂ・ヅの子音が [d] で現れることがあるが、しばしばラ行子音と同様の発音になっていた。（以下の例示でラ行子音は弾き音の記号に代えてrを使うことにする。）

「富士・藤」は両方とも [ɸudi] のように聞こえる発音で両者に違いはなかった。また、[d] が [r] で発音されることがしばしば観察された。

富士山 [furisan], 藤 [ɸuri], 水 [miru] / [midzu]

チ・ツ・ジ・ズが上のように発音される現象、特にチがティ、ツがトゥと発音される現象は、日本語音韻史の知見に照らせば、鎌倉時代の中央（京都）の発音を反映しているものであり、現代の方言観察の面からは、四つ仮名の発音の区別がまだ残っている高知県でも高齢者の発音に見られる現象であって、竹ヶ島でも、数十年前、あるいは明治時代には四つ仮名が発音で区別されていたことを想像させる。

サ行の発音についても注意しておきたい現象が見られた。次に示す事実（セがチエ、ショがチョとなる）が、方言的音声を反映して、音韻として存在してきたものかどうかは判断を保留しておきたい。

背中 [tʃenaka], 但し, 咳 [ʃeki]

商売 [tʃo:bai], 正月 [tʃo:gatsu]

注：「正月」のツは [tsu] であった。

4. 文法項目

1) 原因と理由を表す接続助詞「サカイ」

徳島県では、原因と理由を表す接続助詞については、様々な言い方がある。県内では、ケンのほか、ケニ、キン、キニ、サカイ（ニ）などが使用されており、使用に地域差がある。図2をみると、県南部にはサカイが海岸線に沿って拡がっていることがわかる。このサカイは、近世初期の上方語から拡がったと推測できるが、現代の日本語では不思議なことに、「近畿から断続的に北陸地方、東北地方へと、日本海に沿いながら、津軽海峡をまわり、太平洋側の



図2 仙波ほか (2002)「寒いから」

岩手県北部まで分布」(大西2016) し, 中国・四国・九州には拡がりを見せていない。四国では灘(海部)地区にだけ, サカイが分布している。このサカイに代表されるように灘地区は大阪方言の影響が徳島県において最も色濃く見られる地域である。このことは, いちいち文献を示さないが, すでに多くの指摘がある。

今回の調査では, 自然談話を充分に採集することができなかった(機器の不具合で録音ができていなかった)が, ノートにメモできた「サカイ」の使用例は次のようなものであった。なお, 特別な注意を促すような例はない。1例だけ「サカイニ」が記録されていた。

- オシエテクレタ サカイネ。(教えてくれたからね。)
- フネガ ツケレン サカイナ。(船が着けられないでのな)
- ヨートルサカイ, ワカライデナ。(酔っ払っているから分からなくてね……。)
- オソロシサカイニ。(恐ろしいから。)

2) 打消接続助詞「イデ」

活用語の未然形を受け, 打消しの意を表わしながら下に続ける「イデ」の例が上の項に現れているが(ワカライデナ), 今回の調査では, もう1例が採集されている。半日に満たない調査の中で2例現れているのは, この表現が比較的よく使われていることを暗示するものかもしれない。

- エキガ フライデモネー…… (雪が降らなくてもねえ)

ところでこの語は『日本国語大辞典』には15世紀の「史記抄」に確実な例が現れ, 17世紀後半の「傾城阿波の鳴門」までの用例が示されている。全国的な文献上の分布は, 富山・滋賀・奈良・和歌山・広島・山口・徳島県祖谷・香川・愛媛・高知と密度が高いとは言えないようだ。県内方言資料では, 例文としては, 『阿波の国言葉』『阿波言葉の辞典』『阿波言葉の語法』『鳴門の方言』『大正期徳島市の方言』『昭和末期旧徳島市の方言』『悦田喜和雄方言辞典』『牟岐のことば 地名 道』に見られるものの, 見出しに採用しているのは『大正期徳島市の方言』だけである。なお反語の例が, 『阿波方言集』と『羽ノ浦町誌』『鷺敷町誌』にある。

『阿波方言集』は「祖谷」の言葉としているが, どうやら徳島県の紀伊水道沿岸部に分布が拡がっているようである。

例文の一部を以下に挙げておく。

- 雨ガ降ライデモタイヘーラクジャ (阿波言葉の辞典)
- 才前ガイカイデモ用ハ モトール [お前が行かないでも, 使者ででも事が足る] 全 (阿波言葉の辞典)
- 行カイデモええわ (行かなくてもいいよ。) (鳴門の方言)
- カワイデモ 買わなくても (阿波の国言葉・大正期徳島市の方言・昭和末期旧徳島市の方言)
- トライデモ とらいでも ◇ 盗らなくてもいいのに。(悦田喜和雄方言辞典)
- タイソウナラ コイデモエエハ (牟岐のことば 地名 道)

3) 断定の助動詞「ヤ」

断定の助動詞が「ジャ」から「ヤ」に遷り変わる傾向は県下各地で観察できることであるが, 竹ヶ島では見たり聞いたりできた限り「ジャ」は1回もなく, すべて「ヤ」であった。なお聞き取り例はカタカナで, メモから抜き出した例はひらがなで示す。

- ニチョナ コヤナー (不器用な子だねえ)
- いらちやねえ。(せっかちだねえ。)
- へんぴな所やけんど。
- ねねこやねえ。(赤ん坊だねえ)
- こうしゃな人やなあ (器用な人だなあ)

5. 語彙

以下では、竹ヶ島調査時にいただいた3種のメモにもとづいて、その特性を検討した結果を示す。検討にあたって参照した文献は『日本国語大辞典』（『日国』と略す）『日本方言大辞典』（『日方』と略す）の他、稿末に挙げておく。

語頭に付けた各種記号は、次のような意味である。何も記号が付けられていないものは広く使われていると判断した語である。

また、もとの資料に書かれてあった部分は太字にして示した。語や文の配列は、原則として五十音順にした。

★は（現段階で）竹ヶ島特有と見られる語、☆は灘（海部）地方以外の県内資料に見あたらなかった語で県外には同じ語形・意味の語があるもの、□は（現段階で）灘地方特有の語と見られる語、△は県内的一部地域に同じ語形・意味の語があるものを表す。

△あいだ…明日（大正期徳島市・牟岐・出羽島・海南）

あぎと…あご 『日国』によれば、最古例は「白氏文集天永四年点〔1113年〕、泉鏡花の「高野聖」が最後の文献。県内全域で使われた。牟岐・海南浅川ではアゲトとも。

□あち…私 一人称自称詞。（牟岐・宍喰・鞆奥）

□あてもん…くじ引き ※海南以外の方言資料には見えず。なお、中勘助、内田魯庵の作品中に「あてもん」あり。大阪からこの土地にはいったことばであろう。

あばれかやる…度が過ぎる ※度を超して暴れる。方言資料には見られないが徳島方言として可能な言い方。

★あまぐろ…雨水でできるカビの斑点 ※他の資料に見られない。「ぐろ」は「黒」か。あるいは、「ばらぐろ（茨が生えているところ）」、「はえぐろ（生えているところ）」（以上金沢治『阿波言葉の辞典』による）などの例があることから「カビが生えてかたまりになっているところ」といった意味も考えられるか。

☆あらーの…あります 「あるわの」の「るわ」の部

分が融合し、「らー」となったもの。「そんなこともあらーの」（そんなこともあるよね）。この融合現象は、大阪府泉南方言から和歌山県の方言に広くみられる現象で、瀬戸内海島嶼部の諸方言のほか、宍喰を中心とした徳島県南部方言にもみられ、さらに高知方言へと続いている。南海道に共通する方言の現象として注目される。『牟岐のことば』に「オラー（句）いる 在宅している オレヘンの反対語」。いきすむ…腹に力を入れる 力む。息む。「いきづむ」古語である。『日方』によると、イキズム（息詰）と使用する地域は、兵庫県神戸市・和歌山県・島根県・広島県・山口県・長崎県・熊本県・四国四県としている。

いさましかよ…元気かよ 「かよ」は高知方言でよく用いられる文末詞。「勇ましい」ということばが「元気な」という意味で用いられる。イサマシイを「元気だ。健康だ」の意味で使う、あるいは使ったのは県下全域。当地域では、心安い仲間同士で「元気か？」といったあいさつ言葉として定着している。

★いそいよ…磯魚 イヨ（魚）は県内資料に見つからないが、日本各地に分布する。西日本では「ウオ」から変化したとみられる「イオ」となることが多い。いてこのさ。さっさつさ。 方言資料には見つからないが、上方落語「延陽伯」（桂枝雀）に出てくる言葉。

（おとうちゃんが）「ヨイヨイヨイ」ちゅうたら「おかあちゃんもチャッチャッチャ言うてえな」嫁はん恥ずかしそおに「よろしございます。チャッチャッチャ」言うたら、子ども嬉しそおに「イテコノサ」

このイテコノサは「行ってこよう」のイテコに囁子言葉のノサが続いたものと言う。

（<http://kamigata.fan.coocan.jp/kamigata/rakugo56.htm>による）

☆いやかよ…いやですか 「疑問の文末詞として「か」「よ」を複合させた「かよ」がよく用いられる。徳島市内では用いられることがないが、高知方言でよく用いられる複合文末詞である。

いよ…魚。ウオがイオになり、さらにイヨに変化したものであろう。『鳴門の方言』に「イヨ（HL）一魚」→いそいよ

いり…煮干し 「いりこ」が省略されたもの。「いり

こ」はもともとカタクチイワシを乾物にしたもので、四国地方を中心とした西日本の呼び方で東日本の「煮干し」に対立する方言であった。昨今、香川県伊吹島を中心に「いりこ」が全国に出荷されるようになってから全国共通語として用いられるようになっている。イリは牟岐・神領・木屋平・阿波言葉の辞典に。

★うまめる…薄くする 本来、熱い湯に水を足して温度を下げ、調整することを全国各地で「うめる」というが、これから変化した形であろうか。

□おかさん…お母さん 母親の呼称である。「おかあさん」の長音を脱落させたもの。牟岐でオカヤン、阿波ではオカハン。オカサンは和歌山にある。

おせ…大人 ※県下全域。主に中国・四国・九州に分布する。「おとな」は共通語で後から入ったことばである。『阿波の国言葉』には「オトナ」が「をせ」の語釈に使われているが、『阿波言葉の辞典』は「オセ 大人（オトナとはいわぬ）」とする。

おたゆうさん…神主さん ほぼ県下全域。「たゆう」は「太夫」で、かつて地位をあらわすことばであった。各地で「神職・禰宜」を「たゆう」と呼ぶところが多い。

△おつごも…おおみそか （海南・牟岐・木頭・小松島・羽ノ浦） 吉野川流域はオーツゴモ・オーツゴモリ。一年の最終の日、大晦日。

□おっさん…お坊さん 県内資料に確実例はなし。アクセントは語頭が高いHHLL。「おっさん」は「和尚さん」を省略させたものと考えられている。日本各地で使用される言い方。県内ではオジュッサンが一般的。

おどろく…目がさめる 古語。ほぼ県下全域に残るか。『日本方言大辞典』によると、オドロクを目が覚めるの意味で使う地域は、東北（青森県・岩手県・山形県）、北陸（新潟県・長野県）、近畿（奈良県・和歌山県）、中国（島根県・広島県・山口県）、九州（長崎県・大分県）、四国四県としている。

おら…僕 ほぼ県下全域。自称詞。

△おんし…お前 小松島以南。男が使う。「お主（おぬし）」が訛って「おんし」となった。西日本各地で「お前」の意味で使用される。西日本では尊敬語「お」を略して、「ぬし」というところもある。これ

らの地域では「ぬし」がさらに変化し、「にし」となっているところもある。

★かーしん…おかし 牟岐・海南はカシン。

かざ…におい 県下全域。香りのこと。カザは、西日本を中心に奄美・沖縄諸島まで使用がみられることばである。

かど…にわ ほぼ県下全域。岡山県では、庭の上の方をカドカミ（門上）という。

キャンデー…アイスクリーム かつてはアイスキャンデーと言い、アイスクリームとは別物であった。

★ぎゅんぱ…力いっぱい ギュンバ シボリー シボッテミー。（力一杯、搾れ。搾ってみなさい。）他資料に見えず。当地域で用いられる程度をあらわす副詞である。「精一杯」「思いきり」「一生懸命」などの意味をあらわす。

ぎょうがでる…あげる、もどす （東祖谷・半田・一字・端山・木屋平・阿波・上分・藍園・上勝・勝浦・小松島・羽ノ浦・宝田・相生・上那賀・木沢・日和佐・牟岐・海南・大里）「ぎょう」は関西方言の「げえ」にあたる。共通語では「げろ」。

★きよげがない…不器用 他の資料に見えず。「器用さ」という意味で「器用気」という言葉が使われ、これがないことを婉曲的に言ったものであろう。直接的に「不器用」とは言わず、このような遠回しに言う表現が成立したものと考えられる。

クチアケ 何々の口開け…解禁 『阿波言葉の辞典』に「漁期などの開始（全・多）」とある。県下全域で用いられるという判断がされている。（相生・牟岐）

□けぞかし…ばたばたする 海南町史に「あわただしい」東祖谷では、ケソカシューで「ごそごそする」の意。『日国』『日方』に見えず。

○けぞかし人やねえ。（落ち着きのない人だねえ。）

★げんど（ぞう）なし…魚を釣りにいって釣れなかつたこと ゲンゾウ（見参）と関係があるか。不明。

△こうしゃな人やなあ （器用な人）

公刊された県内方言資料には見つからなかった。木屋平（新居熊太氏メモ27枚目）に「コーシャナキヨーナ」とあるのが見つかっただけであった。『日方』の「巧者な」には「①器用なこと。また、そのさま、その人。佐渡、岡山県苦田郡、広島県比婆郡、香川県など。」『坂出の方言』に「こおしゃな 巧者

な。器用な。「何をやらせても——男だ」とある。
★こころがええ…気持ちがいい 「気持ちがよい」「気分がよい」ことを「こころがええ」という地域はこの地域に限定されるか。「気持ち」の代わりに「こころ」を使うのは県南地方の特徴のように思われる。

★こてな…小さい →コティ【小体】ナカ?

★さー…さお 竿をサワと言うことが、『阿波の国言葉』『改訂阿波言葉の辞典』『牟岐のことば』に出ている。『辞典』では、海部・出羽となっている。sawo→sawa→saaと変化したものであろう。順行同化によって母音の [o] が [a] に変わり、さらに唇音（ここでは [w]）退化の原則が働いてサー [sa:] となったもの。

△さいれ…さんま 『海南町史』『阿波方言集（鞆奥）』にサイレとある。三重・奈良吉野・和歌山でもサイレ（『日方』）「さんま」の方言として、関西では「さいら」ということが多い。この「さいら」の変化形であろう。

□ざまな…大きな 牟岐・海南・鞆奥。宍喰を中心とした海部地方の方言（『阿波言葉の辞典』）である。土佐方言では「ざまな」が「大きい・太い」の意味で用いられる。

★しあい…準備 他の資料に見えず。

★しおもん…干物 『小松島市史』では「ブエン＝塩物（シオモン）や干物に対して」とある。『阿波方言集』には「シヨモン（塩物）しお（塩）漬にした魚（鮭、鰯）」とある。

しこいれてする…力いれて一生懸命する 『上那賀町誌』『相生町誌』『海南町史』にあり。『日国』『日方』にはなし。「しこ」は「四股」。

しご…まぐろ 共通語。『三省堂国語辞典』は「西日本方言」とする。徳島市・牟岐。

□しごたびより…しとしと雨がふり寒い日（シビルは言わない。）東祖谷では「シビル 冷えて感覚がなくなった状態」を言う。『海南町史』には「シビタヒヨリ 曇って寒い日」。『日国』『日方』になし。

□しゃんわれ…知らない, 関係ない 『海南町史』によれば「われ」は助詞で「…よ」に当たる。「シランワレ（知らんよ知ったことか）（卑。）」とある。同様に使われる助詞に「ウェ」があり、これは牟岐でも

使われる。知ランウェ（知らないよ）。

じょうに…たくさん 全県下に分布。程度副詞。

□じより…ぞうり, サンダル 草履の訛。海南ではジョリだが、一般的にはジョーリ。『日葡辞書』では「Iōri（ジャウリ）」。

しょんがつ…正月 ほぼ県下全域で使われてきた。より古い語形はショングワツであり、合拗音グワが含まれていた。

△すいな…妙な 『日方』に、「すいなよー 相手に對してあきれて言う語。あきれたことだ。ばかにしている。和歌山県」とある。古い資料になるが『阿波希ん奴』には「すいなトハ一種特色アリト云フ程ノ意ナリ」とある。「粹な」であろう。

□すけ…おいご 日和佐・牟岐・海南の各資料と『阿波言葉の辞典』に見られる。おんぶ帶、あるいはおんぶ紐。スケをこの意味で使うのは灘。「助」。

○すけでおうたりよ。（※おんぶ紐で背負ってやれよ）

○おいごとすけ。

★する…酔っぱらう（ズル [HL] ニナル。正体不明になる）他の資料で確認は取れなかった。

☆すわぶる…吸う 県内資料に見つからず。香川県三豊郡ほか。なめる、しゃぶる。新潟県及び西日本に拡がっている。「サカナノホネオ スワブル（魚の骨をしゃぶる）」

□せっぱい…たくさん 県内では、牟岐・出羽島。県外では、和歌山県西牟婁郡・東牟婁郡・島根県江津市・高知県。程度副詞。

△せぶらかす…いじめる 那賀川流域・日和佐・牟岐。「子どもをせぶらかいてどーもならん（子どもがいじめて仕方がない）」

せんち…便所 「せっちん（雪隠）」の転、センチは東北から中国・四国までの拡がりを持っている。

せんづく…しないまま このような打消の助動詞に続いて、しないままの意を表わす「づく（づく）」は西日本各地に分布する。

たぐる…せきをする ほぼ県下全域。風邪などのため咳をすること。コズクとも言う。

★ちゃっちゃ…小舟, せんがいき（船外機）。アクセントはHHL。焼き玉エンジンの舟を言う。これらの意味では、他に見られず。なおコボートとは言わ

ないそうだ。

★ちょうすけ…ばか者 方言資料には見あたらぬ。なお、近松門左衛門作の淨瑠璃「曾我会稽山」(1718年)に、僧をののしる言葉として「お寺の長すけ」が「すんぼろ坊主、ねつたい坊主、鉢坊主、是がお寺の長すけと、笑ふてこそは追立ける」のよう出てくる。これにつながる語かもしれない。

☆つばける…浸す 『海南町史』『消え去りゆく大里言葉』に「ツバケル [動] 水に浸す。田に水を入れる。」他の県内資料には見つからず。愛媛県・高知県では使われる。

つぶし…ひざ 三好郡(祖谷・三加茂)および徳島市以南。足の膝、膝頭のこと。

つべ…尻 ほぼ県下全域。

できあなあー デキヤーナー (あいつらはなあ) デキは海部地域に特有の語。「牟岐町の方言」(阿波学会紀要23)に「デキ(レキ) 三人称、彼、あいつ」。また「海部郡出羽島の方言」に「[レキ]」「デキ」<全・男>。「レキサン」「デキサン」<全・女>下。」

☆てんこ…上 県内の方言集では「山の頂上」あるいは「峰」とする。単に「上」の意味とするのは県内資料には見つけていない。岐阜県土岐郡ではこの意味で使われるらしい。

朝のとおから…朝早くから 「疾くから」のウ音便形。

どうなら…困ったな 『阿波半田の方言』には、この意味で「どうだ」とある。文形は同じでも意味はやや異なる。「どうなら」は「どうなる?」と自問の結果、困惑する場合に言うのであろう。

とこまえる…捕まえる ほぼ全県下。牟岐他ではトクマエルとも。

□とったん…お父さん 『牟岐のことば』「オトツタン」とあるが「オトッタン」であろう。その他の県内資料にはない。『日方』では、島根県那賀郡(中流)・香川県手島・佐賀県藤津郡(下流)・長崎県南高来郡・熊本県天草郡(下流)・大分県・宮崎県東諸県郡に記録されていることが分かるが、それぞれ限定された地域が示されているのが興味深い。

なすい…ゆるい 県内の資料の多くは、タバコの味を表現する言葉として扱われているように見える。

『ひわさ 方言とことわざ』では「味が薄い」。『牟岐のことば…』では「ゆるやかな きつくな」として「この煙草はナスイ」の例を示す。『海南町史』は「軽微な」として「ナスイ病氣デモ休ム」の例を挙げている。これが灘地区のナスイの特徴かもしれない。帶などが緩いときにもナスイと言う。

なんしょんぞい…何をしてるんですか ゾイは、終助詞。県下各地で使われてきた。

★にちよな…不器用 アクセントはHLLの頭高。上勝以南。灘(海部)で、ニチヨーナ。

★ねこたばはって ほんまにだー (寝そべって、本当になあ。) 「ねこたばはる」は浅川(『海南町史』)。

和歌山に「ねこそべる」、高知県長岡郡に「ねこたえる」がある。「ねこたば」と関係がありそうである。

△のうが悪い…都合が悪い、調子が悪い 相生・上那賀・木沢・牟岐。牟岐では「体にあってない」の意味も。

のす…たたいて怒る 打つ、殴る、ひどい目にあわせる等の意味で県下全域に分布。

はしり…調理場 台所の流し、台所、炊事場のこと。県内各地で使われてきた。なお、住宅の建築様式の変化にともない、ハシリは死語になりつつあると指摘する人もいる(芝原2004)。

はみ…まむし 日本言語地図では、徳島県の場合、池田町大利と徳島市以南の沿岸部に分布する語形である。県内方言資料では、山城・木屋平・松茂・大正期徳島市・小松島・羽ノ浦・相生・木頭・ひわさ・牟岐・海南・大里に分布。ハメが東祖谷・井川・半田・貞光・端山・木屋平・脇町・阿波・市場・松茂・神山・佐那河内・徳島市に拡がっている。ハミ・ハメ両形が現れる地域もある。歴史的には10世紀の『本草和名』が最古の例。「蝮蛇(略)和名波美」とあるようにハミ(食み)の方が古いようである。また、『日方』によると近畿地方から中国・四国にかけて分布しているようだ。

はやす…神さんのものを燃やす 井川・辻(阿波方言集)・佐那河内・小松島・羽ノ浦の資料にはこの意味で、また牟岐や出羽島については「棟上げに餅を投げること」と書かれている。『阿波言葉の辞典』

には、この意味はもう「古く稀」である旨が記されている。県外では岡山・愛媛で「燃やす」の意味で使用させていたらしい（『日国』『日方』）。

☆（まく・まくる）風がまいてくる（大風ニなる）
どまくる 『牟岐のことば』に「マクル（動）風が強く吹く 海は風がマクトルわ」とあり「まくる」は確認できたが、「まく（まいて）」については確認できなかった。普通には「まくって」と言っていたところに「まいて」が侵入して生まれた言い方だろうか。

☆ひつつけ…ひつつけ寿司 高知県の郷土料理「田舎ずし」のことで、ずけ丼のようなものらしい。「姿ずし・押しづし・巻きずし・詰めずし・ひつつけずし・五目ずし」と高知県下の各地に様々な言い方で伝承されている。竹々島は、高知県と徳島県の境であることから、高知県の食文化にも近いといえよう。

ひとこまえる…きつく捕まえる 『阿波の国言葉』『阿波言葉の辞典』および半田・貞光・上勝・牟岐の方言集に記録されている。また、トコマエルは半田・貞光・木屋平・脇町・藍住・鳴門・神山神領・徳島市・羽ノ浦・阿南西方に見られ、ヒットコマエルも県下かなり広くで使われると思われる。

ひやい…冷たい、寒い 井川・半田・脇町・牟岐の資料に出ている。「寒い」の意味の「ひやい」は、高知・愛媛の他、九州各地に残るようである。

★ひやいようがちがう…非常に寒い 県内資料に見られない。「冷い様が違う」であろう。

□びやびや 果物などが熟れすぎて柔らかくなった状態。「この柿、びやびやじや。」（伊島）（2013年12月、伊島出身者から四国放送ラジオ土曜ワイドとくしまに寄せられた情報による）香川県大川郡でも。

☆びんどろ…腫れて真っ赤になっている 霜焼などにも言う。また、柿がビヤビヤに真っ赤に熟れているときにも言う。この意味は、海陽町独特か。アクセントはHLLLと頭高。

ぶたこ…きたない 「無单袴」で「不潔で汚いさま」を言う。『阿波言葉の辞典』は、「不恰好な 不潔不器用な」の意味を示す。このうち「不恰好な」は徳島市・小松島、神山、「不潔」を挙げるのは他に阿波、「不器用」の意は、藍住・徳島市・宝田の方言資

料に出ている。『日方』では、富山県砺波・岡山県・高知県が「不格好」の意、富山県砺波・石川県・徳島県海部郡で「不潔」、石川県鹿島郡で「無精」の意味。

ほうぱい…親友（男のことば）。共通語だが『岩波国語辞典 第七版』は「現在では古風な言い方」とする。

ほーかい…そうですね

ほーかよ…ほんとに

ほーよの…そうです

ほこのいとりよ。（そこ、退いていなさいよ。）

指示詞の「そ」が「ほ」に変わるもの、この地区の特徴であり、大阪の影響を窺わせる。

ほたえる…子供がさわぐ 全県。ふざける、はしゃぐ、騒ぐことをいう。福井から近畿・中国・四国に分布する。

ぼに…お盆 灘地区ではボーニとも。西日本で広い範囲で使用がみられる。

まいまいする…おどおど、うろうろする マイマイスルを取り上げている県内方言集は2つだけ。『大正期徳島市の方言補遺』には「忙しくてうろうろする」、『佐那河内の方言』には「慌（あわ）てふためく。手の行くところ、足の行くところを忘れる。」とある。このようなマイマイスルは方言辞典などに記録されていないだけなのかもしれない。なお、『日方』には、「忙しく動き回ること、てんてこまい、大慌てのこと。」「うろうろすること。足手まといになること。」とあるのが、ここに示されたマイマイスルに当たるだろう。また、県内方言資料に出てくる他の言い方としては、マイマイコンゴがこのマイマイスルに相当すると思われる。

☆まんどろ…あかりがあかかとしている 『牟岐のことば』に「明々と 満月 今夜はお月さんがマンドロじや」、『阿波言葉の辞典』に「[明々と]（海部）オツキサンガマンドロじや」とある。なおこの言葉、青森津軽方言と山形県東村山郡に同じ意味で残っている。語源は「万灯」に求められる。竹ヶ島でのアクセントはHLLL頭高である。

☆みーがいる…筋肉痛 『山城の方言』にはミガイル。

★みーちんなんぼ？…見物料はいくら？ 見賃。最

近は使わないとか。方言資料に見あたらず。

めがまう…めまい

めんどい…はずかしい (ぶさいくの意でも使うことあり) メンドイを「恥ずかしい」の意味で使うのは県内では下灘地区の特徴であろう。この意味を示しているのは『海南町史』と『消え去りゆく大里言葉』だけである。「不細工。醜い」の意味を載せるのは、『阿波の国言葉』『鳴門の方言』『上勝町誌』『消え去りゆく大里言葉』である。

★もさう (網とか糸がもつれる) 検索した資料に見られなかった。『日方』の「もつれる【縛】」の項に「(1) 糸などがもつれる。《もする》《もする》《もつー》高知県幡多郡」とあるのが参考になるのかもしれない。未詳。

△やっきやた…やけど 羽ノ浦・牟岐・海南にある。なお、海南も、また県内は言うまでもなく普通はヤケハタである。

□やつちや…休憩, おやつ時間 由岐・牟岐・海南。なお、和歌山県東牟婁郡でも。

★やつくと…ちょうど この意味を示す資料は見つからない。『海南町史』は「あいにく」とする。また『阿波方言集』や『阿波言葉の辞典』は祖谷の言葉として、「あいにく」の意味の例を挙げている。竹ヶ島では、ヤックト オラナンダナー (ちょうどいなかったねえ) のように使うというのだが、この例では「あいにく」の意味にも理解できるのだ。

ゆいよる…言っている

ようだい…状態 「容態」羽ノ浦・小松島・牟岐では、病気のときなどの容態を表すが、『阿波半田の方言』では「屁理屈、愚痴」と、『阿波言葉の辞典』『大正期徳島市の方言』は「用事などを頼むといろいろ文句をいって大儀がること」のような意味を示している。また『羽ノ浦町誌』にも「文句、仮病」の意味を挙げている。ヨウダイは単純に「状態」ではないようだ。

よばれ…おねしょ (夜尿) のこと。「ヨバリ」ともいう。

よばれし…宴会に招かれたこと 「呼ばれ衆」で「招待された者」のこと。『日方』に「ちそうに呼ばれた人。招待された人。香川県827／小豆島829」とある。

★ろっぱいさ…ちらかっていること 他の資料に見

えず。アクセントは「い」の部分が高いLLLHL。

7. おわりに

今回の調査では、思いもかけず多くの方からご教示をいたただくことができた。

その結果、ジとヂ、ズとヅの区別が存在したことを窺わせる発音、語頭にガ行鼻濁音が出るという報告についてあらためて適切な解釈を可能にする発音が確認できた。また、ご用意下さった方言メモからは、これまでの方言辞典・方言集に見られない言葉も数多く発見することができた。

ご協力いただいた方々のお名前を伺い損ねたことも少なからずあったのが残念である。以下に、お名前を記録できた方々を記し(順不同)、ここにお名前を挙げることのできなかった方々も含めて感謝申し上げる。

天野賀津子、川野加代子、島田闘子、池添志津恵、戎田ケイ子、公文洋子、戎田里子、池添かほる、山口新吉、池添誠次

【参考文献】

- 石田祐子・岸江信介 (2001) :「徳島県諸方言アクセントについて」『言語文化研究』8 徳島大学総合科学部
上野和昭編 (1997) :『日本のことばシリーズ36 徳島県のことば』 明治書院
大西拓一郎編 (2016) :『新日本言語地図—分布図で見渡す方言の世界—』 朝倉書店
加藤信昭 (1982) :『阿波の方言』『徳島の研究』第6巻
金沢治 (1961) :『阿波言葉の語法』徳島市中央公民館付属図書館
金沢治 (1976) :『改訂阿波言葉の辞典』小山助学館。
金沢浩生・仙波光明・岩佐美紀・石田祐子 (2001) :「相生町の方言」阿波学会紀要第47号
岸江信介・仙波光明・岡田祐子・村田真実 (2010) :「徳島県吉野川流域アクセントの動態—吉野川流域南岸グロットグラム調査報告(2)」徳島大学大学院国語学研究室
岸江信介・仙波光明・岡田祐子・村田真実 (2010) :「徳島県吉野川流域アクセントの動態—吉野川流域南岸グロットグラム調査報告(2)」徳島大学大学院国語学研究室
国立国語研究所編 (1967) :『日本言語地図』大蔵省印刷局
芝原富士夫 (2004) :『阿波方言の語源辞典』教育出版センター
小学館国語辞典編集部 (2000) :『日本国語大辞典 第二版』小学館
仙波光明・岸江信介・石田祐子編 (2002) :『徳島県言語地図』徳島大学国語学研究室
土居重俊 (1997) :「四国の方言」『四国方言考① (四国一般・徳島県・高知県) ゆまに書房
橋本亀一 (1939) :『阿波の國言葉』国書刊行会

宮城文雄 (1956) :「徳島方言概観」『徳島大学学芸紀要』5 人文科学

森重幸 (1962) :「分布図からみた徳島県の方言」阿波学会報告会資料

森重幸 (1982) :「徳島県の方言」『講座方言学11 中国四国地方の方言』図書刊行会

【参照した文献】

「竹ヶ島の方言」の語彙について検討する際に利用した方言辞典、方言集は以下の通りである。各項目の最初は、ファイルの名前であり、メモに示された資料名はほぼこれに依っている。

方言辞典類

阿波の国言葉：橋本龜一編「阿波の国言葉」国書刊行会 1975
全国方言資料集成（原本は、1939刊）

阿波方言集（森本安市）：森本安市著「阿波方言集」森住博榮堂書店 1950 阿波民俗叢書第三輯

たのしい阿波の方言：森本安市著「たのしい阿波の方言」南海ブックス 1979 阿波文庫7

改訂阿波言葉の辞典：金沢治著「改訂 阿波言葉の辞典」小山助学館 1976

徳島の方言：高田豊輝著「徳島の方言」高田豊輝 1985

三好郡

三名村史：田村正編「三名村史」山城町役場 1968

ひがしいやの民俗：東祖谷山村 故事収集委員会ほか編「ひがしいやの民俗」東祖谷山村教育委員会 1990

池田町誌：池田町誌編集委員会編「池田町誌」池田町 1962

井川町誌：西井治夫編「井川町誌」井川町役場 1982

井川町史2006：岡本福治ほか「井川町史」井川町役場 2006
（『阿波学会紀要第44号』所収「井川町の方言」（徳島県方言学会）参考）

三加茂町史：三加茂町史編集委員会編「三加茂町史」三加茂町 2006

山城の方言：山城町 社会 福祉 協議会編「ふるさとの故事 総集編—老人生きがい対策事業老人会三十周年記念—」山城町老人クラブ連合会 1989

美馬郡

半田町誌：半田町誌出版委員会編「半田町誌 下巻」半田町誌出版委員会事務局 1981

阿波学会半田：「総合学術調査報告 半田町 郡土研究発表会紀要38号」1992

阿波半田の方言：半田町方言保存会「阿波半田の方言」半田町方言保存会 2005

一宇村誌：一宇村史編纂委員会編「一宇村史」一宇村 1972

木屋平村史：三木寛人編「木屋平村史」麻植郡木屋平村役場 1971

改訂木屋平村史：木屋平村史編集委員会編「木屋平村史」木屋平村 1996

岩倉村風土記：荒岡一夫編「岩倉村風土記」岩倉校 1939

古宮村誌：三木近太郎著「古宮村誌（稿本）」古宮村郷土研究会 1954

江原町郷土史：「江原町郷土史」江原北尋常高等小学校職員室 1933

息吹く端山：上柿源内「息吹く端山」上柿源内 1996

貞光町の方言：上柿源内・松浦義人「阿波貞光町の息吹」上柿源内 2001

半田町誌：半田町誌出版委員会編「半田町誌 下巻」半田町誌出版委員会事務局 1981

美馬郡木屋平村の方言：インターネット（現在は削除されている模様）

脇町の方言と語詞：國見慶英著「脇町の方言と語詞」國見慶英 1999

阿波郡

阿波町史：阿波町史編纂委員会編「阿波町史」阿波町 1979

市場町史 大典記念：近藤有地藏編 市場町役場 1916

市場町史 町政40周年記念出版：市場町史編纂委員会編 市場町 1996

板野郡

藍住町史：藍住町史編集委員会編「藍住町史」藍住町 1965

とらじろう（藍園村）方言談義：「〈阿波方言〉—故郷を離れて気づく 国訛り—」『とらじろうのおもろな～』<http://www.geocities.jp/jakoba03yatora10hougenn.html>

とらじろう氏は、藍園村出身。昭和13年生まれ。現在三重県在住。

麻植郡

麻植郡誌：麻植郡教育会編「麻植郡誌」麻植郡教育会 1922

改訂山川町史：改訂山川町史刊行会「改訂山川町史」改訂山川町史刊行会 1987

山川町史：山川町史編集委員会編「山川町史」改訂山川町史刊行会 1987

鴨島読本：鴨島町編「鴨島読本」鴨島町（体裁から昭和10年前後に刊行されたものと思われる）

名西郡

神山の方言：神山町成人大学編集部編「神山の方言と言ひ伝え」神山町教育委員会 1990

上分上山村誌編集委員会編「上分上山村誌」上分上山村誌編集委員会 1978

神領村誌：神領村誌編集委員会編「神領村誌」神領村誌編集委員会 1960

鬼籠野村誌：鬼籠野村誌編集委員会編「鬼籠野村誌」徳島県教育印刷 1995

名東郡

ふるさと佐那河内：ふるさと佐那河内編集委員会編「ふるさと佐那河内—民俗と民話—」佐那河内村 1992

鳴門市

鳴門の方言：増田明著「鳴門の方言」増田明 1989
 高島の方言（金沢）：金沢治「高島の方言」第四回郷土研究発表会紀要 鳴門塩業地帯総合調査報告 1958
 鳴門市川東：2016年、川東公民館での調査時に提供されたリスト

徳島市

大正期徳島市の方言：仁木堯著「大正期徳島市の方言」仁木堯 1989
 大正期徳島市の方言補遺：仁木堯著「昭和末期旧徳島市の方言」仁木堯 1990
 昭和末期旧徳島市の方言：仁木堯著「昭和末期旧徳島市の方言」仁木堯 1990
 徳島市史93：徳島市史編さん室「徳島市史 第四巻」徳島市教育委員会 1993

勝浦郡

かみかつ方言辞典：重兵衛「かみかつ方言辞典」平成12年11月28日改訂（かつて上勝町役場のホームページに掲載されていたもの。現在は削除されている。）
 上勝町誌：徳島県勝浦郡上勝町誌編纂委員会「上勝町誌」上勝町誌編纂委員会 1979.12
 阿波訛り（喜田貞吉著作集）：喜田貞吉「喜田貞吉著作集 第一四巻 六十年の回顧・日誌」平凡社 1982

那賀郡（阿南市を含む）

阿南・西方村誌：西方村誌編集委員会編「西方村誌」西方村誌編集委員会 1983
 阿波希ん奴：島田泉山「阿波希ん奴」（草稿）明治34年以降に成立か。
 仙波光明「徳島大学方言研究会報告4 資料紹介『阿波希ん奴』」徳島大学国語国文学 第8号 徳島大学国語国文学会 1995
 羽ノ浦町誌：羽ノ浦町誌編さん委員会編「羽ノ浦町誌 民俗編」

羽ノ浦 1995

宝田村誌：井筒茂編「宝田村誌略（草稿）言語編」（徳島県立図書館所蔵）
 鶯敷のふるさとことば 方言集 改訂版：福富次郎著「鶯敷のふるさとことば 方言集福富次郎 2004
 鶯敷町誌：鶯敷町役場編「鶯敷町史」鶯敷町役場 1940
 相生町誌：相生町誌編纂委員会編「相生町誌」相生町 1973
 上那賀町誌：上那賀町誌編さん委員会編「上那賀町誌」上那賀町 1982
 相生町の方言語彙（金沢）：「那賀郡相生町の方言」総合学術調査報告 相生町 阿波学会紀要第47号 2001
 木沢村誌：木沢村誌編纂委員会編「木沢村誌」木沢村誌編纂委員会 1976
 木頭地方々言語集：井上一男「木頭地方々言語集」（『郷土阿波』14号 通巻14）1937

海部郡

赤河内村郷土誌：笠井藍水編 日和佐町公民館 1959
 悅田喜和雄方言辞典：江津敬「土の言葉—悦田喜和雄方言辞典—」『徳島県立文学館・書道美術館（仮称）開設準備研究紀要 水脈 第2号』徳島県環境生活部生活文化国際総室 2001
 海南町史下巻：海南町史編さん委員会編「海南町史 下巻」徳島県海部郡海南町 1995
 海部郡出羽島の方言：川島信夫「海部郡出羽島の方言」『郷土研究発表会紀要 第13号』徳島県立図書館 1967
 消え去りゆく大里言葉：土壁重信著「消え去りゆく大里言葉」土壁重信 1976
 ひわさ 方言とことわざ：ひわさ方言とことわざ編集委員会「ひわさ 方言とことわざ」日和佐町老人クラブ連合会 1987
 牟岐のことば 地名 道：谷典博著 牟岐町教育委員会発行 2003
 牟岐の方言（役場版）：かつて牟岐町役場のホームページで公開されていたもの（現在公開されているものとは異なる）
 牟岐町の方言：川島信夫・森重幸 郷土研究発表会紀要第23号 1977

Dialect of ex-Kaiyo Town, Tokushima, Japan

SENBA Mitsuaki*, KISHIE Shinsuke and SAKOGUCHI Yukako
 * 109-14 Okuno Wada, Aizumi-cho, Itano-gun, Tokushima 771-1202, JAPAN
 Proceedings of Awagakkai, No.63 (2021), pp.49-59.

